

仁王さまの夜遊び

長野県

むかし。

立石寺（りっしやくじ）の仁王さまは、朝から晩まで仁王門の中に立っているのが、退屈でたまらなくなりました。

「昼間は人に見られるから具合が悪いが、夜くらいは、ちつとは遊んで歩いたってかまわないだろう」と考えて、仁王さまは、こっそり夜遊びに出かけるようになりました。初めのうちは、お寺の近くをぶらぶらしていましたが、そのうち、だんだん遠くまで出かけるようになって、村のほうまで遊びに行くようになりました。

ある晩のこと、仁王さまは、いつものように仁王門から抜け出して、村のほうへぶらぶら歩いて行きました。すると、一軒の家から、明りがさしていました。そうっと近寄って、しょうじの穴からのぞいて見ると、おばあさんが、糸車で、ブンブンブンと、糸を繰っていました。仁王さまは、初めてそんなものを見たので、めずらしくて、一生懸命のぞいていました。

しばらくすると、おばあさんが、ぶーっとひとつ、大きなおならをしました。それがあんまりおかしかったので、仁王さまは、思わずくすくす笑いました。

おばあさんは、その声を聞いて、村の若い衆でものぞいているのかと思って、「におうか」とききました。

仁王さまはびっくりしました。

『仁王か』というところを見ると、おれがここにかくれていることを、ちゃんと見通したにちがいない。恐ろしいばあさんだ」

仁王さまは、そういつて、急いで逃げて帰って、元のとおり門の中に入って、知らん顔をしていましたとき。

原話…『伊那民俗叢書2』伊那民俗研究会編／信濃郷土出版社
再話…村上郁